

人間からの町づくり

田村 明（横浜市技監）

人間からの町づくり

私は静岡県には昔お世話になったことがあります。と申しますのは、私は東京生まれの東京育ちですが、旧制静岡高等学校へ勉強にまいったわけです。現在では地方から東京へ学生が集まるようですが、昔は東京や横浜から静岡へ勉強にきた人も多うございました。私もその一人でした。と同時に、静岡は命の恩人じゃないかと私は思っております。私、東京で胸を悪くし、学校を休学しました。当時、あまり時代がよくございません。静岡だったら、気候も暖かで、お茶とみかんがあって、生きのびれるんじゃないかなという感じでした。私と同じ様に、体を悪くした連中が随分静岡高校へきておりまして、その人達はみんな生きのびております。本当に私は静岡にこなければ、あるいは今日こうやって皆さんにお目にかかれなかったかもしれませ

さらにご縁と申しましようか、静岡高校時代、動員ということで方々へ行かされましたが、遠州の桜木村という所で一週間ぐらのお寺に泊りこんで川の工事を、スコップで土を採り、モッコでかつぐというようなことをやりました。今、その桜木村はなんと掛川市内だそうです。そういうことで、静岡、そして掛川には縁があったわけでございます。

理想と現実のギャップ

それから、ちょっとした自己紹介をさせていただきますと、学校は建築を出しましたが、丹下健三先生とか、ここにいらっしやる菊竹さんのようならまいデザインはともできないと思いましたが、少し脱線をしまして、法学や政治学などいろいろなることを勉強しまして国の役人になりました。しかし役人もしばらくの間で落第しまして、都市計画や地域計画のコンサルタントといましようか、方々の県や市町村の計画を立てるといような仕事をしておりました。横浜に住んでそういう仕事をおったわけですが、横浜に住んでるんだから、お前の考えていることを実際に横浜でやりなさい、という機会がございまして横浜市役所に入り、現在まで一〇年余り横浜での町づくりの仕事をしているわけです。

都市計画については、いろいろ立派な議論がありますし、立派な計画もあります。しかし、そ

れと現実の町づくりはなかなか合わない。昨日は市長の雄大なる構想をお聞きして、私も久しぶりに非常に楽しくなりました。狭い意味の都市計画ではなくて、本当の基礎からの、人間からの町づくりをめざされているのがよくわかりました。これこそまさに、本当の意味の都市計画、町づくりではないかと思うんです。しかし、往々にして、そういう大きな考え方と現実にはギャップがございます。考え方はあるが現実がついてゆかないというのが、どこの国でも共通した都市計画の現状です。特に日本の町づくりはそうではないかと思えます。私も、自分の考えていることを少しでも実現したい、そのためにはいるんなどろした問題やむずかしい問題があるが何とかやってみたいということで、横浜という場で一〇年ほどやってきたわけでございます。

金や法律がなくても町づくりはできる

実際に町づくりということになりますと、お金がないということが、まず第一に障害として出てきます。その次には、法律がそうになっていない、制度がそうになっていない、権限がないという問題が必ず出てきます。こういう基本的な問題を解決していかないと、町づくりはむずかしいと思います。しかしこれは急には変わらない。では、それがなければ何にもできないかというところ、私は決してそうではないと思う。もちろん、お金があった方がよいに決まっていますし、権限もあつた方がよいですし、法律もそれにふさわしいものがあつた方がよい。しかし、なければ

何もできないのではない。なくてもやりようがある。それがなくても、どうやったらやっていけるかということを考えてゆくのが、これからの新しい町づくりではないかと思えます。

「お金でも法律でもない問題が、実は町づくりの中にたくさんございます。たとえば人間の心の問題もそうです。法律でこうせよといったって、人間が根本からそうなるわけでもない。お金があるから、そうなるわけでもない。また、たとえお金と法律の問題でも、それがなくてもやり方がいろいろあります。掛川市長が、そういうことの全体をひっくるめた、ひとつの町づくりの構想を出しておられるということで、非常に感心いたしました。それをぜひ一歩ずつ実現していただきたい。物というのは急に一遍に変わるものではありません。しかし、ひとつの考え方があれば、一歩ずつでも変わってゆくだろうと思います。私のささやかな体験のなかでも、変わらないように見えるもの、あるいはお金がないと駄目だというふうに見えるもの、それが、コッコッやっといううちに少しずつ変わっていったということがあります。そうすると次には、その波及効果が必ず出てくる。そういうふうに私は考えております。私、現実の掛川については詳しいわけではございませんので、これから、町づくりの一般論のようなものを申し上げたいと思います。

分散型社会のモデル・西ドイツ

先だって西ドイツで、西ドイツと日本との都市計画のシンポジウムがございまして、日本から

五人ほど招待され、私もその中の一人に選ばれて行ってまいりましたが、そのついでに、ドイツとかイギリスの都市をまわってきました。ヨーロッパへは数度行きましたが、これまでは大都市を飛行機でまわるといふケースが多く、内陸の中小都市をまわって見たことがございませんでしたので、今度は、大都市、中都市、そして小さい町も見てまいりました。そこで私が非常に感心しましたのは、ドイツの町づくりが、大きい町も、中位の町も、そして小さい町も、それぞれが個性を持ちながらなされているということです。

国でつくりましたシンクタンクで「総合研究開発機構」という所があります。私は現在、その研究のアドバイザーをしておりますが、そこで分散型社会ということを研究しております。日本はどうも過度に、一点に集中しすぎてしまった。もう少し、日本列島全体をうまく使って分散する。その方がいい社会ができるのではないかということを研究しているわけですが、ドイツこそ、先進国の中では分散型の社会になっているということが、今度実際に各都市をまわりまして実によくわかりました。ご承知のとおり、ドイツは奇跡的な戦後復興もしましたし、その後堅実に伸びて、現在ECの中でも最も安定した力を持っています。それがどういふふうにして達成されたか。決して一点だけに集中してワッと走り出したんじゃない。ナチの時代がそういうふうだったわけですが、今度はまったく違う。それぞれの地方がそれぞれの独自性を持ち、それぞれの都市がそれぞれの独自性を持ち、そして市民がそれぞれの独自性を持って、決してあわてずにやっ

てきた。我々からみると、少しのろくさいというふうな感じがしないこともないが、非常に安定的に着実に力を伸ばしている。そういうドイツを見て、まさにここにひとつのモデルがあると思えました。

小さな町にも個性

ドイツには特に大きな町はありません。西ベルリンが人口二〇〇万人ですが、ここは東ドイツの中の陸の孤島で、少し特異な町ですから、ここを除くと一番大きな町はハンブルグで一八〇万人。次がミュンヘンで一三〇万人。その他に百万人都市はありません。大体六〇万人以内の都市が非常に多い。ケルン、ハノーバー、デュッセルドルフ、シュトゥットガルト、エッセン、ブレーメンなど、皆さんがよく耳にされる有名な都市ですが、人口が大体五〇万人、六〇万人というところですよ。それよりも小さな町でも、たとえば大学で有名なハイデルベルグとかゲッティンゲンとか、たくさんの面白い町がございます。今度は私は非常に小さな町にもまいりました。「ハメルーンの笛吹き男」という物語がありますが、そのハメルーンへも行きました。ここは人口わずか五万人の町ですが、とてもきれいな町なんです。もっと小さな町にもまいりました。人口二万人のシュベーパーハル。ここには大きな会堂があって、その前面には大きな急階段がついている。そこで年に一度、演劇をやるんだそうです。階段が舞台になり、会堂の前の広場が観客席

になるということです。町の真ん中でそういうことが自然に行なわれている。掛川でいえば、駅前広場で行なわれているような感じなのです。小さな町ですが、非常に風格のある町です。

ドイツには、そういう風格のある町がいたる所にあります。そして、そこに住む人たちは、大都市の方がいいというようなことを決して考えていない様子です。俺達はここでいいんだということ、自信を持ってやっている。向うの都市計画の教授も、各々の地域を生かしてやっつく、これが我々の特性なんだということ、自信を持って語っておりました。日本はこれまで東京に過度に集中しすぎていました。やはり、それぞれの地域が特性を生かしながら、よりよい国をつくってゆくようにしなければなりません。私は東京生まれの東京育ちですから東京は非常に好きですが、しかしやはり東京だけではあき足らない。自然とか風土とかを生かしたいろんな町が全国各地にある。そして、そこに住んでいる人達がみんな自信を持ってやっているということが非常に重要なことではないかというふうに思います。

自分で発見し、育てる「一番」

掛川には、「一番」とつくものが多いございます。これは大変に重要なことだと思っております。といいますのは、「一番」というのは、その町に住むことの自覚ではないかと考えるからです。いろいろな一番があります。たとえば橋に例をとります。橋は普通長さで測りますが、一番

長い橋というのはもちろん一つしかない。しかし、橋の一番はこれだけではありません。橋の形は吊橋とかトラスとかいろいろありますが、この種類の橋としては長さが一番だということがあります。それから一番高い橋はどこか、一番金をかけた橋、一番時間的に早くできた橋とか、いろいろあるわけです。だから、私は、一番は恐らくたくさんあるのではないかという感じがいたします。つまり、本当にこれは一番なんだ、これは我々にとって非常にユニークなことなんだというのを発見する、それが必要だと思うのです。決して一番と二番だけがあるんじゃないで、一番はたくさんある。たくさんある一番を比べてみても、どれが一番で、どれが二番かが決められない、そういうこともあるんじゃないかと思うのです。

ドイツには、大きな町、中位の町、小さな町がありますが、そこに序列があるかという、別々にありません。比較的大きな、人口五〇万人く六〇万人の町にはそれなりのよさがあります。しかし、大都市ですから、その欠点もないことはないと思うのです。逆に、人口一五万人ぐらいの町は、大都市に比べて多少にぎやかさというような面では劣っているかもしれないませんが、必ず大都市にないものがあります。もっと小さな人口二万人の町でも同じことがいえるでしょう。だから、決してそこには序列がついているわけではないのです。

私達の町にはこういう一番がある。隣の町にはああいう一番があるが、自分たちの町にも一番がある。そういう町づくりができるのではないのでしょうか。ただし、その一番というものは、他人が言ってくれるわけではなくて、自分で発見する。自分で見て、これは一番なんだと自覚しなければ、折角いいものを持っていてもわからないのではないか。"生涯学習都市宣言"で言われていることも、恐らくそういう自覚を市民がするという事ではないか。その意味で、"一番"といわれているのだと思います。今までは東京が一番、大阪が二番、名古屋が三番というように、序列がついておりました。しかしこれからは、分散型の社会の中で、それぞれの町が一番になる。その一番を自分たちの力で発見してゆく。発見するだけではなしに、努力して育ててゆく、つくっていく。私は、そういうことが本当によい町づくりになるのだと思います。

歴史を大切に作る町づくり

それから、ドイツで私が非常に感心いたしましたのは、歴史を大切にしていることです。ハノーバーという町があります。人口約五五万人ぐらいで、ドイツ北東部の中心であり、非常に整った、美しい町です。この町の一番立派な建物は教会と市役所なんです。市役所には高さ五〇、六〇メートルもある大きなドームがあって、その下は大ホールになっています。そこに四つの模型が置いてあるのです。第一の模型は一六八九年の、まだ封建時代のお城のように、堀にめぐらされた町の姿です。第二が一九三九年、つまり第二次大戦が始まる前の町。その次のが一九四五年、戦災で町の九五パーセントがやられている模型です。それが一軒一軒克明につくられてい

る。レンガが崩れたり、屋根が落ちていたり、瓦礫累々たる様子を一二畳ほどもある大きな模型にしてあるのです。そして最後が、現在および将来の模型で、明るい白い絵になっております。俺たちは一遍町を失った。だが、そこから立ち上がって、ちゃんと町づくりをしている。そして、昔のよい建物は元の通りに復元している。しかし、まずかった所は改造して、新しい町づくりをしている。古いものを生かしながら、同時に常に時代と共に新しいものを着実に付け加えていっている。そういうことが、市民の誰もがわかるような形にしてあるわけです。それは、町づくりを一部のプランナーや市役所のお偉方でやるということだけではなく、市民が自覚しながらやってゆくということです。俺たちの町は昔はこうだったんだ、そして今はここまでやってきたんだ、ということをも市民皆々が理解しながら町づくりをしている。本当に歴史を大切にしているということに私は感心いたしました。

ドイツの小さな村のことですが、その村には二〇〇年も三〇〇年もたった家がたくさん残っておるわけです。それらの家は、もともとはハーフティンバーという、木の骨組が外面に出ている建物だった。日本の真壁づくりと同じようなものです。ところが、のちに段々上を塗りつぶして壁にしてしまったわけです。それを今、赤外線写真を撮って、あなたの家はもとはこんなふうに見える、きれいな木部が入っているんですよということを、持ち主に教えている。そして、若干の補助を出して、その壁をかき落として、きれいな木部を出す仕事をしている。小さな村で、自分たちの

伝統を生かすことをやっているのです。いいものを持っていたが、今まで隠れていた。それをもう一度引き出して、歴史の中にある自分たちの町を再自覚しているわけです。そういう息の長い継続的な仕事にドイツで接して、これにも感心いたしました。

考え方を基礎に、着実に

町づくりは、ひとつの事業をするにも一〇年かかるのが普通です。大きな事業は二〇年、三〇年とかかります。そういう仕事を積み上げながら町づくりはできますから、一貫した明日への展望をもって、着実にひとつずつやっていくという姿勢がどうしても必要です。ひとつの考え方をしっかりもっていなければならぬ。その考え方にもとづいて、できることから片づけてゆく。しっかりした考え方を基礎にしないで、事業だけがどんどんアレコレやられている場合が日本では多いのです。今お金がなくても、明日はあるかもしれない。考え方をしっかりしておれば、必ずできる時はくるし、できる方法も見えます。それを、いかげんなものでやってしまふことは、かえって後に悔を残します。掛川市長が出されているのは、そういうフィロソフィというか、考え方だと思ふのです。そこから町づくりのスタートをしているというところに、私は非常に注目するわけでございます。

と同時に、町は誰がつくっていくのかということ。これは決して、市長や市役所の方々だ

けてつくるものではありません。実際に町をつくるのは、お店をもっておられる方とか、工場をもっておられる方とか、住宅をもっておられる方なのです。自分の店、自分の工場、自分の家ですが、同時にそれは町の一部なんです。日本では、俺の土地に俺の家を建てているんだから誰も文句いうことはないじゃないか、というような考え方がまかり通っていますが、先進国といわれるドイツやイギリスでは、そういう考え方はありえません。自分の家をつくっているが、それは明らかに町づくりの一部なんです。むしろ町づくりの一部として、自分の家を作っているという考え方が普通なのです。日本でもそういう考え方がなかったわけではございません。古い京都の町屋をご覧になれば、そのことがよくわかります。いつの間にか、そういう考え方が消えてしまったんです。大きな街路事業も必要でしょうけれども、それだけで町ができるわけではありません。そこに、ちゃんとよい中味が入り込んでゆく。そうして各々が質の高いものになってゆく。その全体がひとつの調和をもっているということが町づくりです。したがって、市民の皆さんがいっしょになってつくってゆくということではなければ、決してよい町づくりはできません。

町は市民皆がつくるもの

まことに当り前のことですが、町は人間がつくってきました。自然発生的に、ただ何となくできたものではありません。よい町づくりとは、人々がチエを出し合って、ちゃんとした考え方をもってやることです。フィロソフィをもってやる。その中で具体的な計画が生まれ、少しずつできてゆくものなのです。有名な話ですが、ケルンの大寺院は六〇〇年かかってできております。三〇〇年、四〇〇年を、ひとつの建物にかけるなんて当り前なんです。まして町づくりに一〇年や二〇年かけるというのは、当り前すぎる話なのです。日本では、非常にせっかちです。確かにそれがこれまでの高度成長をもたらしたひとつの力だと思えますが、これからは、本当によいものを、着実にじっくりと貯えてゆくという時代だと思えます。町づくりには、そういう蓄積が最も大切なのです。少しでも、よいものを確実に付け加えてゆく。その中で、人間としての工夫を加えてゆく。何となくできたということではなく、また、何かで決まっているからその通りにやったということではなく、もっとよい方法、よい内容があるんじゃないかと皆なで考えて、着実につくってゆくことなのです。

町は決して誰かからつくられるものではなくて、市民の皆さんがいっしょになってつくってゆくものです。そういうものとして、掛川の町づくりが進められることを期待します。

318

2009310889

〇 地方の時代への模索

1030-554000-4024

自然と都市と人間のあり方をもとめて

昭和55年1月16日 第1刷発行

〇 昭和55年2月1日 第2刷発行

定価950円

(送料160円)

1980

企画 掛川市
日本都市問題会議

編者 伊藤 滋 [筆]
木原 啓吉
榛原 村純

発行者 久我 史郎

発行所 株式会社 清文社

東京都千代田区神田小川町3の4 (三四ビル)
〒101 電話 03(291)2651 番 振替 東京8-101996番
大阪市北区南扇町7の20 (宝山ビル新館)
〒530 電話 06(361) 2597番 振替 大阪18351番
広島市銀山町2の4 (高東ビル)
〒730 電話 0822(43)5233番 振替 広島29252番

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

亜細亜印刷・神保製本所

B16 田村 1980.2

日本都市問題会議掛川シンポジウム参加者

- 阿部 和彦 日本開発構想研究所
- 伊藤 滋 東京大学工学部助教授*
- 石光 研二 農村開発企画委員会*
- 岡崎 泰造 住宅金融公庫
- 金子 修 日本都市センター研究室
- 木原 啓吉 朝日新聞社編集委員*
- 菊竹 清訓 菊竹清訓建築設計事務所主宰*
- 近藤 忠行 平和相互銀行調査部
- 山東 良文 住宅金融公庫理事* (前国土庁大都市圏整備局長)
- 島 淑子 都市計画アトリエ
- 瀬底 恒 日本民芸館理事*
- 田村 明 横浜市技監*
- 戸沼 幸市 早稲田大学理工学部教授*
- 中山 高樹 菊竹清訓建築設計事務所
- 濱 英彦 厚生省人口問題研究所人口資質部長*
- 原田 敬美 菊竹清訓建築設計事務所
- 平井 邦彦 防災都市計画研究所*
- 宮丸 吉衛 環境文化研究所研究部長*
- 本吉 庸浩 読売新聞社論説委員*
- 山本 孝夫 新日本製鉄開発企画部

*印は執筆者